

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520197

研究課題名(和文) インド神話映画の映像学的研究

研究課題名(英文) A Study on Indian Mythological Films

研究代表者

赤井 敏夫 (Akai, Toshio)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：00192873

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：インド映画黎明期に支配的なジャンルであった神話映画がなぜ衰退したのか、一方で特定の地方では今でもその伝統が続いているのはなぜかを調査することが本研究の目的であった。独立以降の社会制度の激変がその一因であるとは容易に予想できるし、本研究でもこれを覆すような反証は見つかっていない。だが世俗化だけで全てを説明できないのである。50～60年代のテルグ語映画のように神話映画が政界編成のためのプロパガンダに利用された結果新たな宗教的関心を生み出した例がある。宗教性の変質そのものが映画によって促されているのである。映画・宗教・政治は相互影響下にあり、それ故今後の観察が必要であるというのが本研究の結論である。

研究成果の概要(英文)：This research is to find out why mythological films, dominant and productive in silent and early talkie eras, declined swiftly and now remains only in certain regional language industries, especially in Telugu film industry. An expected reason was the transformation of Indian modern society after the Independence when Indian audience's interest rapidly turned to social matters, and no evidence was found in my research to discredit this hypothesis. However, the secularization alone cannot explain everything. In some cases as showcased in Telugu industries in 50s and 60s, the popularity of mythological films, accompanied by drastic changes in political field, affected people's religious interest. Here the transformation of religiosity itself was deduced by a cinematic fashion. Thus, we can conclude that films, religiosity, and politics could, and still can, make influence upon each other, and the furtherance of close examination of this matter should be kept on.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術一般

キーワード：映像学 南アジア ヒンドゥー教 神話 民衆芸能 無声映画

1. 研究開始当初の背景

(1)インド映画には主にヒンドゥー教神話を再話する、もしくはヒンドゥー教に留まらずクリスチャンやムスリム信仰の宗教的モチーフをあつかう一連の作品(以下、「神話映画」と略)があるが、これは映像研究では未開拓な領域で、国内においては映像学のみならず文化人類学、社会学の分野でもほとんど先例がない。国外においてはまずマラーティ語映画からベンガル語映画を取り扱ったゴカールの業績(Kusam Gokarn, "Popularity of Devotional Films" 1985、博士論文・未刊行)があり、続いてドワイヤーの先駆的研究(Rachel Dwyer, *Filming the Gods, Religion and Indian Cinema*, 2006)が発表されたが、これらが対象とするのはヒンディー語映画を中心とした北インドの映画に集中している。一方でヒンディー語以外の地方語によって製作される映画(以下、「地方語映画」と略)によっては現在でも一定数の神話映画が公開され、商業的な成功をおさめているという現象が確認できる。本研究では南インドの地方語映画、特にテルグ語映画における神話映画を調査することで、ゴカール、ドワイヤーが先鞭をつけたインド映画における神話映画研究を発展させようとする意図のもとに着手された。

(2)本研究の代表者は2006年以来インド映画を南インドの地方語映画を中心として調査し、インド娯楽メディアにおいて映画が確立した支配的な優越性の要因を、植民地支配とインド社会近代化の観点から学術的に位置づけようとしてきた。そこから得られた知見は学会発表や学術誌で公開すると同時に、700本以上のインド映画をタイトル、リリース年、出演者、製作スタッフ、シノプシス等に分類し電子アーカイブ化したデータベースのかたちで利用可能となっている。

(3)このような研究の過程で、ヒンディー語映画ではメインストリームから外れた神話映画が、テルグ語映画など特定の地方語映画ではなお確固たる命脈を保つのみならず、近來にいたって以前にはない表現の多様性を発展させていることが確認できた。そして神話映画をインド映画に支配的な世俗の主題をとりあつかうジャンルの作品と比較すると、両者の間に映像表現上の一定の照応関係があることが推定できた。現代インドに舞台設定をしながら、ヒーロー像の形成やストーリー展開において神話的モチーフを援用する例がきわめて多いためである。ここから映画観客の間で神話的な映像叙述の方法が一種の「教養」として共有されているのではないかとの仮説が成り立つ。急激に近代化が進むなかで今なお宗教儀礼が重要な役割を持つインド社会において、現在も一定の観客に受容されている神話映画の映像学的意義を学術的に規定しようとすることは、調査するに足る研究課題であると認識するに至った。

2. 研究の目的

インド映画における神話映画の発祥と変遷を映画史的にあとづけながら、そこに見られる独自の映像表現の意義を、聖俗の共存する近代化を果たしたインド社会と照応させながら明確化する。

3. 研究の方法

南インド地方語映画における神話映画を、(1)一次資料の蒐集分析、(2)制作過程に関する情報収集、(3)他分野から相互影響関係の調査との、3点から検証していく。

(1)1980年代以降製作のものが一定数DVDなど映像メディアで再販されており、これを蒐集分析することである程度全体像を明確にすることを可能とする。

(2)神話映画の制作はメインストリームの商業映画とは別種の制作スタッフや俳優陣が専従して関与している。この分野の監督や美術監督等の関係者への聞き取り調査を通じて、実際の制作過程や対象とする観客層に対する認識等に関する情報を収集する。

(3)宗教習俗における儀礼が中心的な調査対象となる。文化人類学や民族音楽研究の既存の業績を参照することと、現在も行われている宗教儀礼を実地調査することで対応する。

4. 研究成果

(1)映像資料はテルグ語映画のスーパースターとされるNT・ラーマ・ラオ(以下NTR)主演作を中心に50年代後半から70年代中期にかけての代表作を蒐集できた。

この過程で神話映画の代表作が地方語映画の複数の産業を越境してリメイクされる例が少なくないことが判明した。NTR主演作 *Bhookailas* (1958)がラージクマール主演の同名のカンナダ語映画(1958)にリメイクされたのがその代表例である。比較検証した結果、同一のストーリー展開に立ちながら、NTRとラージクマールというテルグ語/カンナダ語映画を代表するヒーローによって別々に演じ分けられることで、地方語映画ごとの映像表現の差異を確認することが可能であることが分かった。同様の映像表現の差別化はNTRとシヴァージ・ガネーサンの主演の違いでテルグ語/タミル語映画のリメイク作品にも確認できる。南インド映画における地方語映画の映像表現上の差別化をリメイク作品を介して確認できることに関しては、その一端を論文「インド映画におけるダビング」(2012)の中で言及した。

映像分析の過程で当初神話映画と見なしていたものの中に、別種のジャンルに属する作品群があることに気づき、映画史上におけるこれらの位置づけを明確化することに努めた。SV・シュリーニワースによる先行研究S. V. Srinivas, "The Case of *Patala Bhairavi*" (2001)でフォークロア映画と命名されたこのジャンルは、神話映画と類似の映像話法上の定型を擁しながら、既存の二大叙

事詩（ラーマヤーナとマハーバーラタ）やブラーナ説話に基づかない作品群で、ダグラス・フェアバンクスの *The Thief of Bagdad* (1924) 等に啓発された一種のファンタジーと見ることができる。調査を進めてゆく過程で、南インド神話映画全盛期と見えた 50～60 年代にこれらフォークロア映画が多数製作され、テルグ語映画では神話映画よりも重要な役割を果たしていた可能性が高いことが分ってきた。これは以下の点でことさら重要である。テルグ語映画では NTR が 80 年代初めに独自政党を結成して政界に参入し州政府運営で指導的役割を果たすことになるのだが、この過程で神話映画を政治的プロパガンダに利用したという指摘が先行研究においてしばしばなされており、この説の妥当性を検証することは本研究の目的のひとつであった。しかし「偉大なる指導者」としての NTR のヒーロー像は神話映画だけによって培われたものではなく、寧ろフォークロア映画を介して一般大衆の間にこのイメージが定着していった可能性が高いことが確認できた。つまり NTR が州首相就任以降にクリシュナ神役で主演した神話映画は、すでに一般大衆の中に成立したカリスマ性を追認することで政治的利用を図ったものと想定する方が妥当なのである。政界への波及度のみならず、フォークロア映画にはその成立過程が口承伝承と断絶しているにもかかわらず、同時代に地域的に確立していた民間芸能の話法を積極的に活用するなど、越境的表現形式として興味深い特徴が多数確認できる。これらの映像表現上の特徴に関しては、テルグ語映画研究の第一人者である SV・シュリーニワースと情報交換を行い、多くの新たな知見を得た。ことに最近のシュリーニワースの業績や、UM・ブルグバンダの最新研究（U. M. Bhurugbanda, “Genealogies of the Citizen-Devotee: Popular Cinema, Religion and Politics in South India,” 2011、博士論文）で指摘されているように、インドにおける宗教性とは極めて可塑的なものであり、フォークロア・神話映画で形成されたカリスマ性からも影響を蒙って変質を果たすものであるという点に関しては、インド映画が持つ聖俗を越境した機能を確認しえるという意味で大いに啓発された。これらの新たな知見に関しては「インド映画におけるジャンル～テルグ語映画のフォークロア映画を題材に～」(2012)として口頭発表を行った。

神話映画はインド映画で最初に成立したジャンルであり、サイレント期には国産映画の主流を占めていた。これらサイレント期の神話映画を多数所蔵しているマハーラーシュトラ州プネーの国立フィルム・アーカイヴで専門家と情報交換を行い、ゴカールンの博士論文などを文書館で参照した。サイレント期インド映画研究の第一人者であるスレーシュ・チャプリア教授から以下の指摘を受けたことは本研究において重要である。即ち、

ダーダサヒブ・ファルケが 1913 年に最初の国産映画 *Raja Harischandra* を製作するにあたって啓発を受けたとされる *The Life of Christ* は、既存研究で指摘されているように英国映画ではなく、オーストラリアで製作されたものである可能性が高いこと、また神話映画はトーキー期に入ってソーシャル映画と呼ばれる別ジャンルに主流の地位を譲るのだが、特に 80 年代に始まった国营テレビの二大叙事詩の映像化以降は映画ではなくテレビシリーズとして広く受容されていることである。この映画からテレビへというメディアの変化に関しては、放送インフラの整備といった環境的推移より他に何らかの内的要因が想定できるのか、今後の研究課題である。

蒐集した映像資料のアーカイヴ化に関しては当初計画からは大幅に遅れ研究期間内に軌道に乗せることはできなかった。最大の理由は蒐集した DVD ベースの映像データの劣化が激しく通常の再生機で再生できない事例が数多く見られたからである。対策としてはデータ劣化の激しいディスクに対応した第三国製の再生機に PC を連結し必要箇所のキャプチャリングを行える装置を最終年度に導入したが、素材の抽出蓄積を行うに留まり、項目化にまでは至っていない。なお研究期間中に研究対象となった 50～60 年代の作品の一部が映像共有サイト Youtube で無料配信されるようになり、この傾向が拡大されるならば今後の研究にはこれらを参照することで足るようになる可能性がある。

(2) 実際に神話映画の製作に携わっている映画関係者、ことにテルグ語映画では 1995 年の *Ammoru* で現代的な神話映画の新境地を開いたとされるコーダ・ラーマクリシュナ監督への聞き取り調査を予定していたが、研究期間中にアポイントメントをとることができず、実現できなかった。しかしメインストリーム映画の一線で活躍する女優（プリヤマニ、2011 年、およびニティヤ・メーネン、2012、2013 年）からの聞き取り調査によって、女神役での神話映画への出演は将来的に実現したい役柄であるとの共通した証言を得たことから、現在の映画界においても神々を演ずることは特定のステータスにつながるものと認識されていることが確認できた。この成果の一部は論文「インド映画におけるダビング」(2012)の中で言及した。

(3) 現行の宗教儀礼と神話映画との関係については、以下のように現地調査を行った。

2011 年にケーララ州シャバリマラのアイヤッパン寺院の祭礼を中心に現地調査を行った。シャバリマラはインド全土から巡礼を集める聖地であると同時に、巡礼路にムスリムのモスクやキリスト教教会をふくむ場合もあるという点からしても横断宗教的特徴を持つ寺院であり、ケーララのマラーヤラム語映画のみならずカンナダ語映画でもアイヤッパン縁起を題材にした神話映画が相当

数作成されているという意味で、本研究においては重要な対象となっていたものである。調査の結果アイヤッパンを題材にした神話映画には巡礼の過程を連鎖的に映像化することが定型となっており、観客に対して仮想的に巡礼を体験できるようにすることを眼目に作成されることが少なくないことが確認できた。と同時にシャバリマラへの巡礼は20世紀中葉までは今日ほど盛んではなく、70年代後半にマラーラム語やタミル語映画でアイヤッパン祭祀をめぐる作品が公開されて人気を博して以来州内外から多数の巡礼を集めるようになったとの現地での証言を得たことは、本研究にとって重要な成果であった。神話映画があくまで懐古的で前近代的な産物ではなく、インド社会において聖と俗を橋渡しする文化的回路としての役割を果たしていることが確認できたためである。

アーンドラ・プラデーシュ州バドラチャラムのラーマ寺院の祭礼や縁起はテルグ語映画で取り上げられることが多いため、シャバリマラと並んで調査対象に予定していたが、日程的關係から現地調査は行えなかった。しかしこれ以外にも人類学者MN・シュリーニワースが研究対象にしたカルナータカ州コダグ地方のタラカーヴェリ寺院を2011年に調査し(M. N. Srinivas, *Religion and Society Among the Coorgs of South India*, 1952)、有名なサンスクリット化理論の実例となる土着宗教が正統ヒンドゥー教へと吸収される過程を観察できたことは、神話映画の映像表現を分析する上で有効であった。

③ケーララ州トリシュール～タミル・ナードゥ州ポーラッチの地域で2011～2013年に地方都市や農村で催される小規模祭礼を調査し、ことに祭礼行列で用いられる山車や演し物がかなり忠実に神話映画の映像表現において再現されていることを確認した。

2012年にはケーララ州立伝統芸能学校カラーマンドラムを調査し、舞踏の表現形式であるアビナヤやムドラ(カタカリやモヒニアットムなど南インドの古典舞踊で確立されている表情や指先を用いた感情表現の定式)が、簡略されたかたちではあるが神話映画での映像表現に応用されていることを確認した。

以上の現地調査によって判明したのは、フロントリティ(固定された正面からのアングル)やシンボルとしての目の強調など、宗教学者エックがヒンドゥー教祭礼の特徴としている類像的ヴィジュアルが、神話映画において忠実に反映されていること(Diana Eck, *Darshan, Seeing the Divine Image in India*, 1998)。映画における前近代から宗教的連続性を確認できたことは本研究の成果のひとつである。現地調査で得た知見は口頭発表「インド映画のフォーミュラ～量産と寡占の秘密～」(2011)と「インド映画におけるジャンル～テルグ語映画のフォークロア映

画を題材に～」(2012)の中に反映させた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

赤井敏夫、インド映画におけるダビング、人間文化、査読有、31巻、2012、1-11

赤井敏夫、新興中産階級のインド映画受容～バンガロールの事例を中心に～、人間文化、査読有、32巻、2014、19-33

〔学会発表〕(計 5 件)

赤井敏夫、インド映画の言語別観客動態～バンガロールの事例を中心に～、日本映像学会、2011年5月19日、北海道大学(北海道札幌市)

赤井敏夫、インド映画におけるダビング、神戸学院大学人文学会、2011年10月8日、神戸学院大学(兵庫県神戸市)

赤井敏夫、インド映画のフォーミュラ～量産と寡占の秘密～、学習院大学文学部英語英米文学科(招待講演)、2011年12月2日、学習院大学(東京都)

赤井敏夫、新興中産階級のインド映画受容～バンガロールの事例を中心に～、神戸学院大学人文学会、2012年10月6日、神戸学院大学(兵庫県神戸市)

赤井敏夫、インド映画におけるジャンル～テルグ語映画のフォークロア映画を題材に～、日本映像学会関西支部、2012年12月8日、神戸学院大学(兵庫県神戸市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

赤井 敏夫 (AKAI, Toshio)

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：00192873

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：